

Kokoro – My Parents and I – Parts 1-9 (Natsume Sōseki)

ちゅう りょうしん わたくし
中 両親と私

いち
一

うち かえ あんがい おも ちち げんき まえみ とき たい かわ こと
宅へ帰って案外に思ったのは、父の元気がこの前見た時と大して変わっていない事であつた。

「ああ帰ったかい。そうか、それでも卒業ができてまあ結構だった。ちょっとお待ち、今顔を洗って来るから」

にわ で なに ふる むぎわらぼう うし ひよけ くく つ
父は庭へ出て何かしていたところであった。古い麦藁帽の後ろへ、日除のために括り付けた薄汚ないハンケチをひらひらさせながら、井戸のある裏手の方へ廻って行った。

がっこう 普通の人間として当然のように考えていた私は、それを予期以上に喜んでくれる父の前に恐縮した。

「卒業ができてまあ結構だ」

父はこの言葉を何遍も繰り返した。私は心のうちでこの父の喜びと、卒業式のあった晩先生の家の食卓で、「お目出とう」といわれた時の先生の顔付とを比較した。私には口で祝ってくれながら、腹の底でけなしている先生の方が、それほどにもないものを珍しそうに嬉しがる父よりも、かえって高尚に見えた。私はしまいに父の無知から出る田舎臭いところに不快を感じ出した。

「大学ぐらい卒業したって、それほど結構でもありません。卒業するものは毎年何百人だつてあります」

私はついにこんな口の利きようをした。すると父が変な顔をした。

「何も卒業したから結構とばかりいうんじゃない。そりゃ卒業は結構に違いないが、おれのいうのはもう少し意味があるんだ。それがお前に解っていてくれさえすれば、……」

私は父からその後を聞こうとした。父は話したくなさそうであったが、とうとうこういった。

「つまり、おれが結構という事になるのさ。おれはお前の知ってる通りの病気だろう。去年の冬お前に会った時、ことによるともう三月か四月ぐらいなものだろうと思っていたのさ。それがどういう具合か、今日までこうしている。起居に不自由なくこうしている。そこへお前が卒業してくれた。だから嬉しいのさ。せつかく丹精した息子が、自分のいなくなった後で卒業してくれるよりも、丈夫なうちに学校を出てくれる方が親の身になれば嬉しいだろうじゃないか。大きな考えをもっているお前から見たら、高が大学を卒業したぐらいで、結構だ結構だといわれるのは余り面白くもないだろう。しかしおれの方から見てご覧、立場が少し違っているよ。つまり卒業はお前に取ってより、このおれに取って結構なんだ。解ったかい」

私 一言もなかった。詫まる以上に恐縮して俯向いていた。父は平気なうちに自分の死を覚悟していたものとみえる。しかも私の卒業する前に死ぬだろうと思いつめていたとみえる。その卒業が父の心にどのくらい響くかも考えずにいた私は全く愚かものであった。私は鞆の中から卒業証書を取り出して、それを大事そうに父と母に見せた。証書は何かに押し潰されて、元の形を失っていた。父はそれを鄭寧に伸した。

「こんなものは巻いたなり手に持って来るものだ」

「中に心でも入れると好かったのに」と母も傍から注意した。

父はしばらくそれを眺めた後、起って床の間の所へ行って、誰の目にもすぐはいるような正面へ証書を置いた。いつもの私ならすぐ何とかいはずであったが、その時の私はまるで平生と違っていた。父や母に対して少しも逆らう気が起らなかった。私はだまって父の為すがままに任せておいた。一旦癖のついた鳥の子紙の証書は、なかなか父の自由にならなかった。適当な位置に置かれるや否や、すぐ己れに自然な勢いを得て倒れようとした。

に
一

私は母を蔭へ呼んで父の病状を尋ねた。

「お父さんはあんなに元気そうに庭へ出たり何かしているが、あれでいいんですか」

「もう何ともないようだよ。大方好くおなりなんだろう」

母は案外平気であった。都会から懸け隔たった森や田の中に住んでいる女の常として、母はこういう事に掛けてはまるで無知識であった。それにしてもこの前父が卒倒した時には、あれほど驚いて、あんなに心配したものを、と私は心のうちで独り異なる感じを抱いた。

「でも医者はその時到底むずかしいって宣告したじゃありませんか」

「だから人間の身体ほど不思議なものはないと思うんだよ。あれほどお医者が手重くいったものが、今までしゃんしゃんしているんだからね。お母さんも始めのうちは心配して、なるべく動かさないようにと思ってたんだがね。それ、あの気性だろう。養生はしなざるけれども、強情でねえ。自分が好いと思ひ込んだら、なかなか私のいう事なんか、聞きそうにもなさらないんだからね」

私はこの前帰った時、無理に床を上げさせて、髭を剃った父の様子と態度とを思い出した。「もう大丈夫、お母さんがあんまり仰山過ぎるからいけないんだ」といったその時の言葉を考へてみると、満更母ばかり責める気にもなれなかった。「しかし傍でも少しは注意しなくっちゃ」といおうとした私は、とうとう遠慮して何にも口へ出さなかった。ただ父の病の性質について、私の知る限りを教えるように話して聞かせた。しかしその大部分は先生と先生の奥さんから得た材料に過ぎなかった。母は別に感動した様子も見せなかった。ただ「へえ、やっぱり同じ病気でね。お気の毒だね。いくつでお亡くなりかえ、その方は」などと聞いた。

私は仕方ないから、母をそのままにしておいて直接父に向かった。父は私の注意を母よりは真面目に聞いてくれた。「もっともだ。お前のいう通りだ。けれども、己の身体は必竟己の身体で、その己の身体についての養生法は、多年の経験上、己が一番能く心得ているはずだからね」といった。それを聞いた母は苦笑した。「それご覧な」といった。

「でも、あれでお父さんは自分でちゃんと覚悟だけはしているんですよ。今度私が卒業して帰ったのを大変喜んでるのも、全くそのためなんです。生きてるうちに卒業はできまいと思ったのが、達者なうちに免状を持って来たから、それが嬉しいんだって、お父さんは自分でそういつていましたぜ」

「そりゃ、お前、口でこそそうおいだけれどもね。お腹のなかではまだ大丈夫だと思っ
てお出のだよ」

「そうでしょうか」

「まだまだ十年も二十年も生きる気でお出のだよ。もっとも時々わたしにも心細いよ
うな事をおいだがね。おれもこの分じゃもう長い事もあるまいよ、おれが死んだら、お前はど
うする、一人でこの家にいる気かなんて」

私は急に父がいなくなって母一人が取り残された時の、古い広い田舎家を想像して見た。こ
の家から父一人を引き去った後は、そのまま立ち行くだろうか。兄はどうするだろうか。母
は何というだろうか。そう考える私はまたこの土を離れて、東京で気楽に暮らして行け
るだろうか。私は母を眼の前に置いて、先生の注意——父の丈夫でいるうちに、分けて貰う
ものは、分けて貰って置けという注意を、偶然思い出した。

「なにね、自分で死ぬ死ぬっていう人に死んだ試しはないんだから安心だよ。お父さんなんぞ
も、死ぬ死ぬっていいながら、これから先まだ何年生きなさるか分るまいよ。それよりか黙
ってる丈夫の人の方が剣呑さ」

私は理屈から出たとも統計から来たとも知れない、この陳腐なような母の言葉を黙々と聞いて
いた。

さん
三

私のために赤い飯を炊いて客をするという相談が父と母の間に起った。私は帰った
当日から、あるいはこんな事になるだろうと思って、心のうちで暗にそれを恐れていた。私
はすぐ断わった。

「あんまり仰山な事は止してください」

私は田舎の客が嫌いだった。飲んだり食ったりするのを、最後の目的としてやって来る彼ら
は、何か事があれば好いといった風の人ばかり揃っていた。私は子供の時から彼らの席に侍
するのを心苦しく感じていた。まして自分のために彼らが来るとなると、私の苦痛はいつそ

う 甚^{はなはだ}しいように想像^{そうぞう}された。しかし私は父や母の手前^{てまえ}、あんな野鄙^{やひ}な人を集^{あつ}めて騒^{さわ}ぐのは止せともいいかねた。それで私はただあまり仰山^{しゅちやう}だからとばかり主張^{しゅちやう}した。

「仰山^{ちっ}仰山^{しやうがい}とおいいだが、些^{ちっ}とも仰山^{しやうがい}じゃないよ。生涯^{にど}に二度とある事じゃないんだからね、お客^{あた}ぐらいするのは当^{まえ}り前^{えんりよ}だよ。そう遠慮^しをお為^しでない」

母は私が大学^{だいがく}を卒業^{そつぎやう}したのを、ちょうど嫁^{よめ}でも貰^{もら}ったと同じ程度^{おな}に、重^{おも}く見^みているらしかった。

「呼^よばなくっても好^{なん}いが、呼^{なん}ばないとまた何^{なん}とかいうから」

これは父の言葉^{ことば}であった。父は彼らの陰口^{かげぐち}を気^きにしていた。实际^{じっさい}彼らはこんな場合^{ばあい}に、自分^{よきどお}たちの予期^{よきどお}通りにならないと、すぐ何^{ひとびと}とかいいたがる人々^{ひとびと}であった。

「東^{とうきやう}京^{ちが}と違^{ちが}って田舎^{うらさ}は蒼蠅^{うらさ}いからね」

父はこうもいった。

「お父^{とう}さんの顔^{かお}もあるんだから」と母^つがまた付^{くわ}け加^{くわ}えた。

私は我^がを張^はる訳^{わけ}にも行^ゆかなかつた。どうでも二人^{ふたり}の都合^{つごう}の好^いいようにしたらと思^{おも}い出^だした。

「つまり私^{わたくし}のためなら、止^よして下^{くだ}さいというだけなんです。陰^{かげ}で何か^{なに}いわれるのが厭^{いや}だからというご主^{しゅい}意^いなら、そりやまた別^{べつ}です。あなた^{ふりえき}がたに不利益^{こと}な事^しを私^しが強^{しゅちやう}いて主^{しゅちやう}張^{しゅちやう}したつて仕^{しかた}方^{かた}がありません」

「そう理^{りくつ}屈^{くつ}をいわれると困^{こま}る」

ちち 父^{ちち}は苦^{にが}い顔^{かお}をした。

「何もお前^{まえ}のためにするんじゃないとお父^{とう}さんがおっしやるんじゃないけれども、お前^{とう}だつて世^{せけん}間^{げん}への義^ぎ理^りぐらいは知^しっているだろう」

母はこうなると女^{おんな}だけにしどろもどろな事をいった。その代り口数^{くちかず}からいうと、父と私を
ふたりよ
二人寄せてもなかなか敵^{かな}うどころではなかった。

「^{がくもん}学問をさせると人間^{にんげん}がとかく理屈^{りくつ}っぽくなっていけない」

父はただこれだけしかいわなかった。しかし私はこの簡単^{かんたん}な一句^{いっく}のうちに、父が平生^{へいぜい}から私に
たい
対してもっている不平^{ふへい}の全体^{ぜんたい}を見た。私はその時^{とき}自分^{じぶん}の言葉^{ことば}使用^{つか}の角張^{かどば}ったところに気が付
かずに、父の不平^{ほう}の方ばかりを無理^{むり}のように思った。

父はその夜^よまた気^きを更^かえて、客^{きゃく}を呼ぶなら何日^{いつ}にするかと私の都合^{つごう}を聞いた。都合^いの好いも
わる
悪いもなしにただぶらぶら古^{ふる}い家^{いえ}の中^{なか}に寝起^{ねお}きしている私に、こんな問^といを掛^かけるのは、父の
お
方が折^おれて出^でたのと同じ事^{おな}であった。私はこの穏^{おだ}やかな父^{おな}の前^{まえ}に拘泥^{こどわ}らない頭^{あたま}を下^さげた。私
は父と相談^{そうだん}の上^{うえ}招待^{しょうたい}の日取^{ひど}りを極^きめた。

その日取^{ひど}りのまだ来^こないうちに、ある大^{おお}きな事^{おこ}が起^{おこ}った。それは明治^{めいじ}天皇^{てんのう}のご病^{びょう}気^きの報知^{ほうち}で
あった。新聞紙^{しんぶんし}ですぐ日本^{にほん}中^{じゅう}へ知^しれ渡^{わた}ったこの事件^{じけん}は、一軒^{いっけん}の田舎^{いな}家^かのうちに多少^{たしょう}の曲折^{くっせつ}を
へ
経^まてようやく纏^{まと}まろうとした私の卒業^{そつぎょう}祝^{いわ}いを、塵^{ちり}のごとくに吹^ふき払^{はら}った。

「まあ、ご遠慮^{えんりょ}申^{もう}した方がよかろう」

眼鏡^{めがね}を掛^かけて新聞^{しんぶん}を見ていた父^{ちち}はこういった。父^{ちち}は黙^{だま}って自分^{じぶん}の病^{びょう}気^きの事^{こと}も考^{かんが}えているらし
かった。私はついこの間^{あいだ}の卒業^{そつぎょう}式^{しき}に例年^{れいねん}の通^{とお}り大学^{だいがく}へ行^{ぎょうこう}幸^{さいわい}になった陛下^{へいか}を憶^{おも}い出^だしたり
した。

よん
四

小勢^{こせい}な人数^{にんず}には広^{ひろ}過ぎる古^{ふる}い家^{いえ}がひっそりしている中に、私^{わたし}は行李^{りょうし}を解^{こう}いて書物^{しょぶつ}を繻^{ひもと}き
はじめた。なぜか私は気^きが落^おち付^つかなかった。あの目眩^{めまぐ}るしい東京^{とうきょう}の下宿^{げしゆく}の二階^{にかい}で、遠^{とお}く走^{はし}る
でんしゃ おと みみ ページ いちまいいちまい い ほう き は ころもち
電車^{でんしゃ}の音^{おと}を耳^{みみ}にしながら、頁^{ページ}を一^い枚^{まい}一枚^{まい}にまくって行く方^{ほう}が、気^きに張^はりがあつて心^{こころ}持^{もち}よ
く勉^{べんきょう}強^{きやう}ができた。

私はややともすると机^{つくえ}にもたれて仮寝^{うたたね}をした。時^{とき}にはわざわざ枕^{まくら}さえ出^だして本式^{ほんしき}に昼寝^{ひるね}を
むさ こと め さ めみ こえ き つづ
食^{むさ}べる事^{こと}もあつた。眼^めが覚^さめると、蝉^{せみ}の声^{こえ}を聞^きいた。うつつから続^{つづ}いているようなその声

は、急に八釜しく耳の底を搔き乱した。私は凝とそれを聞きながら、時に悲しい思いを胸に抱いた。

私は筆を執って友達のだれかれに短い端書または長い手紙を書いた。その友達のあるものは東京に残っていた。あるものは遠い故郷に帰っていた。返事の来るのも、音信の届かないのもあった。私は固より先生を忘れなかった。原稿紙へ細字で三枚ばかり国へ帰ってから以後の自分というようなものを題目にして書き綴ったのを送る事にした。私はそれを封じる時、先生ははたしてまだ東京にいるだろうかと疑った。先生が奥さんといっしょに宅を空ける場合には、五十恰好の切下の女の人がどこからか来て、留守番をするのが例になっていた。私がかつて先生にあの人は何ですかと尋ねたら、先生は何と見えますかと聞き返した。私はその人を先生の親類と思い違えていた。先生は「私には親類はありませんよ」と答えた。先生の郷里にいる続きあいの人々と、先生は一向音信の取り遣りをしていなかった。私の疑問にしたその留守番の女の方は、先生とは縁のない奥さんの方の親戚であった。私は先生に郵便を出す時、ふと幅の細い帯を楽に後ろで結んでいるその人の姿を思い出した。もし先生夫婦がどこかへ避暑にでも行ったあとへこの郵便が届いたら、あの切下のお婆さんは、それをすぐ転地先へ送ってくれるだけの気転と親切があるだろうかなどと考えた。そのくせその手紙のうちにはこれというほどの必要の事も書いてないのを、私は能く承知していた。ただ私は淋しかった。そうして先生から返事の来るのを予期してかかった。しかしその返事はついに来なかった。

父はこの前の冬に帰って来た時ほど将棋を差したがらなくなった。将棋盤はほこりの溜ったまま、床の間の隅に片寄せられてあった。ことに陛下のご病氣以後父は凝と考え込んでいるように見えた。毎日新聞の来るのを待ち受けて、自分が一番先へ読んだ。それからその読がらをわざわざ私のいる所へ持って来てくれた。

「おいご覧、今日も天子さまの事が詳しく出ている」

父は陛下のことを、つねに天子さまといていた。

「勿体ない話だが、天子さまのご病氣も、お父さんのとまあ似たものだろうな」

こういう父の顔には深い掛念の曇りがかかっていた。こういわれる私の胸にはまた父がいつたお斃れるかわからないという心配がひらめいた。

「しかし大丈夫だろう。おれのような下らないものでも、まだこうしていただけるくらいだから」

父は自分の達者な保証を自分で与えながら、今にも己れに落ちかかって来そうな危険を予感しているらしかった。

「お父さんは本当に病気を怖がってるんですよ。お母さんのおっしゃるように、十年も二十一年も生きる気じゃなさそうですぜ」

母は私の言葉を聞いて当惑そうな顔をした。

「ちょっとまた将棋でも差すように勧めてご覧な」

私は床の間から将棋盤を取りおろして、ほこりを拭いた。

五

父の元気は次第に衰えて行った。私を驚かせたハンケチ付きの古い麦藁帽子が自然と閑却されるようになった。私は黒い煤けた棚の上に乗っているその帽子を眺めるたびに、父に対して気の毒な思いをした。父が以前のように、軽々と動く間は、もう少し慎んでくれたらと心配した。父が凝と坐り込むようになると、やはり元の方が達者だったのだという気が起った。私は父の健康についてよく母と話し合った。

「まったく気のせいだよ」と母がいった。母の頭は陛下の病と父の病とを結び付けて考えていた。私にはそうばかりとも思えなかった。

「気じゃない。本当に身体が悪かないんでしょうか。どうも気分より健康の方が悪くなって行くらしい」

私はこういって、心のうちでまた遠くから相当の医者でも呼んで、一つ見せようかしらと思案した。

「今年の夏はお前も詰らなからう。せつかく卒業したのに、お祝いもして上げる事ができず、お父さんの身体もあの通りだし。それに天子様のご病気で。——いっその事、帰るすぐにお客でも呼ぶ方が好かったんだよ」

私が帰ったのは七月の五、六日で、父や母が私の卒業を祝うために客を呼ぼうといいだしたのは、それから一週間後であった。そうしていよいよと極めた日はそれからまた一週間の余も先になっていた。時間に束縛を許さない悠長な田舎に帰った私は、お蔭で好もしくない社交上の苦痛から救われたも同じ事であったが、私を理解しない母は少しもそこに気が付いていないらしかった。

崩御の報知が伝えられた時、父はその新聞を手にして、「ああ、ああ」といった。

「ああ、ああ、天子様もとうとうおかくれになる。己も……」

父はその後をいわなかった。

私は黒いうすものを買うために町へ出た。それで旗竿の球を包んで、それで旗竿の先へ三寸幅のひらひらを付けて、門の扉の横から斜めに往来へさし出した。旗も黒いひらひらも、風のない空気のなかにだらりと下がった。私の宅の古い門の屋根は藁で葺いてあった。雨や風に打たれたりまた吹かれたりしたその藁の色はとくに変色して、薄く灰色を帯びた上に、所々の凸凹さえ眼に着いた。私はひとり門の外へ出て、黒いひらひらと、白いめりんすの地と、地のなかに染め出した赤い日の丸の色とを眺めた。それが薄汚ない屋根の藁に映るのも眺めた。私はかつて先生から「あなたの宅の構えはどんな体裁ですか。私の郷里の方とは大分趣が違っていませんか」と聞かれた事を思い出した。私は自分の生れたこの古い家を、先生に見せたくもあった。また先生に見せるのが恥ずかしくもあった。

私はまた一人家のなかへはいった。自分の机の置いてある所へ来て、新聞を読みながら、遠い東京の有様を想像した。私の想像は日本一の大きな都が、どんなに暗いなかでどんなに動いているだろうかの画面に集められた。私はその黒いなりに動かなければ仕末のつかなくなった都会の、不安でざわざわしているなかに、一点の燈火のごとくに先生の家を見た。私はその時この燈火が音のしない渦の中に、自然と捲き込まれている事に気が付かなかった。し

ばらくすれば、その灯もまたふっと消えてしまうべき運命を、眼の前に控えているのだとは
もと固より気が付かなかった。

私は今度の事件について先生に手紙を書こうかと思っ、筆を執りかけた。私はそれを
十行ばかり書いて已めた。書いた所は寸々に引き裂いて屑籠へ投げ込んだ。(先生に宛て
てそういう事を書いても仕方がないとも思ったし、前例に徴してみると、とても返事をくれ
そうになかったから)。私は淋しかった。それで手紙を書くのであった。そうして返事が来れ
ば好いと思うのであった。

ろく
六

八月の半ばごろになって、私はある朋友から手紙を受け取った。その中に地方の中学
教員の口があるが行かないかを書いてあった。この朋友は経済の必要上、自分でそんな
位地を探し廻る男であった。この口も始めは自分の所へかかって来たのだが、もっと好い
地方へ相談ができたので、余った方を私に譲る気で、わざわざ知らせて来てくれたのであ
った。私はすぐ返事を出して断った。知り合いの中には、ずいぶん骨を折って、教師の職にあ
りつきたがっているものがあるから、その方へ廻してやったら好かろうと書いた。

私は返事を出した後で、父と母にその話をした。二人とも私の断った事に異存はないよう
であった。

「そんな所へ行かないでも、まだ好い口があるだろう」

こういつてくれる裏に、私は二人が私に対してもっている過分な希望を読んだ。迂闊な父や母
は、不相当な地位と収入とを卒業したての私から期待しているらしかったのである。

「相当の口って、近頃じゃそんな旨い口はなかなかあるものじゃありません。ことに兄さん
と私とは専門も違うし、時代も違うんだから、二人を同じように考えられちゃ少し困ります」

「しかし卒業した以上は、少なくとも独立してやって行ってくれなくっちゃこっちも困る。
人からあなたの所のご二男は、大学を卒業なすって何をしてお出ですかと聞かれた時に返事
ができないようじゃ、おれも肩身が狭いから」

父は^{じゅうめん} 澁面をつくった。父の考えは、古^{ふる}く住^すみ慣^なれた郷^{こう}里^りから外^{そと}へ出^でる事^{こと}を知ら^しなかつた。その郷^{だれかれ}里^{だれかれ}の誰^{だれかれ}彼^{だれかれ}から、大^だ学^{がく}を卒^{そつ}業^{ぎょう}すればい^げくらぐ^{きゅう}らい月^と給^とが取^とれるもの^とだろうと聞^きかれたり、ま^{ひやくえん}あ百^{ひやくえん}円^{えん}ぐ^らいなもの^らだろうかとい^{ひとびと}われたりした父^がは、こ^がうい^がう人^が々^とに^が対^がして、外^{がい}聞^{ぶん}の悪^{わる}く^ないよ^うに、卒^{そつ}業^{ぎょう}した^かた^たての私^{ひろ}を片^み付^{あし}けた^そか^らつた^むので^ある。広^{ひろ}い都^{みやこ}を根^{こん}拠^{きょ}地^ちと^して考^かえ^てい^る私^はは、父^みや母^{あし}から^そら見^みると、ま^ある^あで^あ足^あを空^{そら}に^む向^あけて^ある^あ歩^あく^あ奇^あ体^あな^あ人^あ間^あに^あ異^あな^あら^あな^あか^あつ^あた。私^はの^あ方^あでも、実^じ際^{さい}そ^あうい^あう人^あ間^あのよ^あうな^あ気^あ持^あを折^あ々^あ起^あした。私^ははあ^あか^あら^あさ^あま^あに自^あ分の^あ考^あえ^あを打^あち^あ明^あける^あには、あ^あま^あり^あに距^あ離^あの^あ懸^あ隔^あの^あ甚^あしい^あ父^あと母^あの^あ前^あに^あ黙^あ然^あと^あして^あいた。

「お^ま前^えのよ^あく先^{せん}生^{せい}先^{せん}生^{せい}とい^あう方^{かた}に^あでもお^ね願^がい^いした^ら好^いい^じゃ^ない^か。こ^とん^な時^{とき}こ^そ」

母^ははこ^うよ^り外^ほかに^{せん}先^{せい}生^{せい}を^{かい}解^{しゃく}釈^{しやく}す^る事^{こと}が^でき^なか^つた。そ^の先^わ生^{たくし}は^く私^{かえ}に^{くに}国^{かえ}へ^ち帰^ちつ^たら^ち父^のの^ち生^ちきて^いる^うち^に早^{はや}く^{ざい}財^{さん}産^わを^わ分^もけて^{もら}貰^すえ^と勧^ひめ^る人^{ひと}で^あつ^た。卒^{そつ}業^{ぎょう}した^から、地^ち位^いの^ち周^{しゅう}旋^{せん}を^して^やら^うとい^う人^{ひと}で^はな^かつ^た。

「そ^の先^{なに}生^ちは^き何^きを^して^いる^のか^い」と父^{ちち}が聞^きいた。

「何^{なん}に^もし^てい^ない^んで^す」と私^{こた}が答^{こた}えた。

私^ははと^くの^む昔^{かし}から^先生^{せい}の^何も^して^いな^いとい^う事^{こと}を^父にも^母にも^告げ^たつ^もり^でいた。そ^うし^て父^はは^たし^かに^{それ}を^{記憶}して^いる^はず^であ^つた。

「何^{なん}も^して^いな^いとい^うの^は、ま^たど^うい^う訳^{わけ}か^ね。お^前が^{それ}ほ^ど尊^{そん}敬^{けい}す^るく^らい^な人^{ひと}なら^何か^やつ^てい^そう^なもの^だが^ね」

父^ははこ^うい^って、私^を諷^{ふう}した。父^の考^{かん}え^では、役^{やく}に^たつ^もの^は世^よの中^{なか}へ^出て^みん^な相^{そう}当^{とう}の^地位^ちを^得て^働いて^いる。必^ひ竟^{きやう}や^くざ^だか^ら遊^{あそ}ん^でい^るの^だと^結論^{けつろん}して^いる^らし^かつ^た。

「お^れの^よう^な人^{にん}間^{げん}だ^つて、月^げ給^{きゅう}こ^そ貰^ちゃ^いない^が、こ^れで^も遊^{あそ}ん^でば^かり^いる^んじ^ゃない」

父^ははこ^うも^いつ^た。私^はは^{それ}で^もま^だ黙^{だま}つ^てい^た。

「お^前の^よう^な偉^えい^な方^{かた}なら、き^つと^何か^{くち}口^{さが}を^く探^くして^下さ^るよ。頼^{たの}ん^でご^{らん}覧^{らん}な^のか^い」と母^が聞^きいた。

「いいえ」と私は答えた。

「じゃ仕方がないじゃないか。なぜ頼まないんだい。手紙でも好いからお出しな」

「ええ」

私は生返事をして席を立った。

しち
七

父は明らかに自分の病気を恐れていた。しかし医者^{いしゃ}の来るたびに蒼蠅^{うるさ}い質問^{しつもん}を掛けて相手^{あいて}を困^{こま}らす質^{たち}でもなかった。医者^ほの方^{ほう}でもまた遠慮^{えんりよ}して何^{なん}ともいわなかった。

父^{しご}は死^{こと}後の事^{かんが}を考^{かんが}えているらしかつた。少^{すく}なくとも自分^{自分}がいなくなった後^{あと}のわが家^{いえ}を想像^{そうぞう}して見^みるらしかつた。

「小供^{こども}に学問^{がくもん}をさせるのも、好^よし悪^あしだね。せつかく修業^{しゅうぎょう}をさせると、その小供^{こども}は決^{けつ}して宅^{うち}へ帰^{かえ}って来^こない。これじゃ手^てもなく親^{おや}子を隔^{かく}離^りするために学問^{がくもん}させるようなものだ」

学問^{がくもん}をした結果^{けつ}兄^{あに}は今^{いま}遠国^{えんごく}にいた。教育^{きょういく}を受けた因果^{いんが}で、私^{わたし}はまた東京^{とうきょう}に住^すむ覚悟^{かくご}を固^{かた}くした。こういふ子^こを育^{そだ}てた父^{ちち}の愚痴^{ぐち}はもとより不^ふ合理^{ごうり}ではなかつた。永年^{えいねん}住^すみ古^{ふる}した田舎^{いな}家^かの中^{なか}に、たつた一人^{ひとり}取り残^{のこ}されそうな母^{えが}を描^だき出^だす父^{ちち}の想像^{さび}はもとより淋^{ちが}しいに違^{ちが}いなかつた。

わが家^{うち}は動^{うご}かす事^{こと}のできないものと父^{ちち}は信^{しん}じ切^きつていた。その中^{うち}に住^すむ母^{はは}もまた命^{いのち}のある間^{あいだ}は、動^{うご}かす事^{こと}のできないものと信^{しん}じていた。自分^{自分}が死^しんだ後^{あと}、この孤^こ独^{どく}な母^{はは}を、たつた一人^{ひとり}伽藍^{がらんどう}堂^{どう}のわが家^{うち}に取り残^{のこ}すのもまた甚^{はなはだ}しい不^ふ安^{あん}であつた。それだのに、東京^{とうきょう}で好^いい地位^{ちい}を求^{もと}めろといつて、私^{わたし}を強^しいたがる父^{ちち}の頭^{あたま}には矛盾^{むじゆん}があつた。私^{わたし}はその矛盾^{むじゆん}をおかしく思^{おも}つたと同^{どう}時^じに、そのお蔭^{かげ}でまた東京^{とうきょう}へ出^でられるのを喜^{よろこ}んだ。

私^{わたし}は父^{ちち}や母^{はは}の手前^{てまえ}、この地位^{ちい}をできるだけ^{どりよく}の努力^{よそ}で求^{もと}めつつあるごとくに装^{よそ}おわなくてはならなかつた。私^{わたし}は先生^{せんせい}に手紙^{てがみ}を書^かいて、家^{いえ}の事情^{じじょう}を精^{くわ}しく述^のべた。もし自分^{自分}の力^{ちから}でできる事^{こと}があつたら何^{なん}でもするから周^{しゅう}旋^{せん}してくれと頼^{たの}んだ。私^{わたし}は先生^{せんせい}が私^{わたし}の依^{いら}頼^いに取り合^あうまいと思^{おも}いながらこの手紙^{てがみ}を書^かいた。また取り合^あうつもりでも、世^せ間^{けん}の狭^{せま}い先生^{せんせい}としてはどうする事^{こと}でも

きまいと思いながらこの手紙を書いた。しかし私は先生からこの手紙に対する返事がきつと来るだろうと思って書いた。

わたくし はそれを封じて出す前に母に向かっていった。

「先生に手紙を書きましたよ。あなたのおっしゃった通り。ちょっと読んでご覧なさい」

母は私の想像したごとくそれを読まなかった。

「そうかい、それじゃ早くお出し。そんな事は他に気を付けなくても、自分で早くやるものだよ」

母は私をまだ子供のように思っていた。私も実際子供のような感じがした。

「しかし手紙じゃ用は足りませんよ。どうせ、九月にでもなって、私が東京へ出てからでなくっちゃ」

「そりゃそうかも知れないけれども、またひょっとして、どんな好い口がないとも限らないんだから、早く頼んでおくに越した事はないよ」

「ええ。とにかく返事は来るに極ってますから、そうしたらまたお話ししましょう」

私はこんな事に掛けて几帳面な先生を信じていた。私は先生の返事の来るのを心待ちに待った。けれども私の予期はついに外れた。先生からは一週間経っても何の音信もなかった。

「大方どこかへ避暑にでも行っているんでしょう」

私は母に向かって言訳らしい言葉を使わなければならなかった。そうしてその言葉は母に対する言訳ばかりでなく、自分の心に対する言訳でもあった。私は強いても何かの事情を仮定して先生の態度を弁護しなければ不安になった。

私は時々父の病気を忘れた。いっそ早く東京へ出てしまおうかと思ったりした。その父自身もおのれの病気を忘れる事があった。未来に対する所置は一向取らなかった。私はついに先生の忠告通り財産分配の事を父にいい出す機会を得ずに過ぎた。

はち
八

くがつはじめになって、私^{わたくし} はいよいよまた東京^{とうきょう} へ出ようとした。私は父^{ちち} に向かって^む 当分^{とうぶん} 今^{いま} ま
で^{どお} 通り^{がくし} 学資^{おく} を送^{たの} ってくれるようにと頼^{たの} んだ。

「ここにこうしていたって、あなたのおっしゃる^{どお} 通り^{ちい} の地位^え が得^え られるものじゃないですか
ら」

私は父^{きぼう} の希望^う する地位^ゆ を得^{こと} るために東京^ゆ へ行くような事^{こと} をいった。

「無論^{むろん} 口^{くち} の見付^{みつ} かるまでで^い 好^い いですから」ともいった。

私は心^{こころ} のうちで、その口^{くち} は到底^{とうてい} 私の頭^{あたま} の上^{うへ} に落^お ちて来^こ ないと思^{おも} っていた。けれども事情^{じじょう} に
うとい父^{はんたい} はまたあくまでもその反対^{しん} を信^{しん} じていた。

「そりゃ^{わずか} 僅^{あいだ} の間^{あいだ} の事^{こと} だろうから、どうにか都合^{つごう} してやろう。その代^{かわ} り永^{なが} くはいけないよ。
相当^{そうとう} の地位^え を得^え 次第^{しだい} 独立^{どくりつ} しなくっちゃ。元来^{がんらい} 学校^{がっこう} を出^{いじょう} た以上^{いじょう} 、出^{いじょう} たあくる日^ひ から他^{ひと} の世話^{せわ}
になんぞなるものじゃないんだから。今の若^{わか} いものは、金^{かね} を使^{つか} う道^{みち} だけ心得^{こころえ} ていて、金^{かね} を取^と
る方^{ほう} は全^{まっ} く考^{かんが} えていないようだね」

父^{ほか} はこの外^{ほか} にもまだ色々^{いろいろ} の小言^{こごと} をいった。その中^{なか} には、「昔^{むかし} の親^{おや} は子^こ に食^く わせてもらったの
に、今の親^{おや} は子^こ に食^く われるだけだ」などという言葉^{ことば} があつた。それらを私^{わたし} はただ黙^{だま} っ^き て聞^き いて
いた。

小言^{ひととお} が一通^す り済^{とき} んだと思^{しず} った時^{とき} 、私^{わたし} は静^{せき} かに席^た を立^た とうとした。父^{ちち} はいつ行くかと私^{わたし} に尋^{たず} ね
た。私^{わたし} には早^{はや} いだけ^よ が好^よ かった。

「お母^{かあ} さんに日^み を見^み てもらいなさい」

「そうしましょう」

その時の私^{わたし} は父^{ちち} の前^{まえ} に存^{ぞん} 外^{がい} おとなし^い かつた。私^{わたし} はなるべく父^{ちち} の機嫌^{きげん} に逆^{さか} らわ^ず ずに、田舎^{いなか} を出^い
ようとした。父^{ちち} はまた私^{わたし} を引^ひ き留^と めた。

「お前が東京へ行くと宅はまた淋しくなる。何しろ己とお母さんだけなんだからね。そのおれも身体さえ達者なら好いが、この様子じゃいつ急にどんな事がないともいえないよ」

私はできるだけ父を慰めて、自分の机を置いてある所へ帰った。私は取り散らした書物の間に坐って、心細そうな父の態度と言葉を、幾度か繰り返し眺めた。私はその時また蝉の声を聞いた。その声はこの間中聞いたのと違って、つくつく法師の声であった。私は夏郷里に帰って、煮え付くような蝉の声の中に凝と坐っていると、変に悲しい心持になる事がしばしばあった。私の哀愁はいつもこの虫の烈しい音と共に、心の底にしみ込むように感ぜられた。私はそんな時にはいつも動かずに、一人で一人を見詰めていた。

私の哀愁はこの夏帰省した以後次第に情調を変えて来た。油蝉の声がつくつく法師の声に変わると共に、私を取り巻く人の運命が、大きな輪廻のうちに、そろそろ動いているように思われた。私は淋しそうな父の態度と言葉を繰り返しながら、手紙を出しても返事を寄こさない先生の事をまた憶い浮べた。先生と父とは、まるで反対の印象を私に与える点において、比較の上にも、連想の上にも、いっしょに私の頭に上りやすかった。

私はほとんど父のすべでも知り尽していた。もし父を離れるとすれば、情合の上に親子の心残りがあるだけであった。先生の多くはまだ私に解っていなかった。話すと約束されたその人の過去もまだ聞く機会を得ずにいた。要するに先生は私にとって薄暗かった。私はぜひともそこを通り越して、明るい所まで行かなければ気が済まなかった。先生と関係の絶えるのは私にとって大いな苦痛であった。私は母に日を見てもらって、東京へ立つ日取りを極めた。

きゅう
九

私がいよいよ立とうという間際になって、(たしか二日前の夕方のものであったと思うが、)父はまた突然引っ繰り返った。私はその時書物や衣類を詰めた行李をからげていた。父は風呂へ入ったところであった。父の背中を流しに行った母が大きな声を出して私を呼んだ。私は裸体のまま母に後ろから抱かされている父を見た。それでも座敷へ伴れて戻った時、父はもう大丈夫だといった。念のために枕元に坐って、濡手拭で父の頭を冷していた私は、九時頃になってようやく形ばかりの夜食を済ました。

翌日になると父は思ったより元気が良かった。留めるのも聞かずに歩いて便所へ行ったりした。

「もう大丈夫」

父は去年の暮倒れた時に私に向かっていったと同じ言葉をまた繰り返した。その時ははたして口でいった通りまあ大丈夫であった。私は今度もあるいはそうなるかも知れないと思った。しかし医者はまだ用心が肝要だと注意するだけで、念を押しても判然した事を話してくれなかった。私は不安のために、出立の日が来てもついに東京へ立つ気が起らなかった。

「もう少し様子を見てからにしましょうか」と私は母に相談した。

「そうしておくれ」と母が頼んだ。

母は父が庭へ出たり背戸へ下りたりする元気を見ている間だけは平気でいるくせに、こんな事が起るとまた必要以上に心配したり気を揉んだりした。

「お前は今日東京へ行くはずじゃなかったか」と父が聞いた。

「ええ、少し延ばしました」と私が答えた。

「おれのためにかい」と父が聞き返した。

私はちょっと躊躇した。そうだといえば、父の病気の重いのを裏書きするようなものであった。私は父の神経を過敏にしたくなかった。しかし父は私の心をよく見抜いているらしかった。

「気の毒だね」といって、庭の方を向いた。

私は自分の部屋にはいって、そこに放り出された行李を眺めた。行李はいつ持ち出しても差支えないように、堅く括られたままであった。私はぼんやりその前に立って、また縄を解こうかと考えた。

私は坐^{すわ}ったまま腰^{こし}を浮^うかした時^{とき}の落^おち付^つかない気^き分^{ぶん}で、三^{さん}、四^よ日^{にち}を過^すごした。すると父^{ちち}がま
た卒^{そつ}倒^{とう}した。医^い者^{しゃ}は絶^{ぜつ}対^{たい}に安^{あん}臥^がを命^{めい}じた。

「どうしたものでしょうね」と母^{はは}が父^きに聞^きこえないよう^{ちい}な小^こさな声^{こえ}で私^{わたし}にい^いった。母^{かお}の顔^{かお}はいか
にも心^{こころ}細^{ほそ}そうであ^あった。私^{わたし}は兄^{あに}と妹^{いも}とで電^{でん}報^{ぱう}を打^うつ用^{よう}意^いをした。けれど寝^ねている父^{ちち}にはほ
とんど何^{なん}の苦^く悶^{もん}もな^なか^かつた。話^{はなし}をする^{する}ところ^{ところ}などを見^みると、風^{かぜ}邪^{じゃ}でも引^ひいた時^{とき}と全^まく同^{おな}じ
事^{こと}であ^あった。その上^{うえ}食^{しょく}欲^{よく}は不^ふ断^{だん}より進^{すす}んだ。傍^{はた}のもの^{もの}が、注^{ちゅう}意^いしても容^{よう}易^いにいう事^{こと}を聞^き
かな^なか^かつた。

「どうせ死^しぬんだから、旨^{うま}いものでも食^くって死^しななく^くちや」

私^{わたし}には旨^{ことば}いもの^{こっけい}という父^{ひきん}の言^{こと}葉^はが滑^{くわ}稽^きにも悲^ひ酸^{さん}にも聞^きこえ^えた。父^{ちち}は旨^{くち}いもの^いを口^{くち}に入^いれら^られる
都^{みやこ}には住^すんでい^いな^なか^かつたのである。夜^よに入^いってか^かき餅^{もち}など^やを焼^やいてもら^らってぼ^ぼりぼ^り嚙^か
だ。

「どうしてこ^{かわ}う^う渴^{かつ}くのか^かね。や^{しん}っ^{しん}ぱ^{じょうぶ}り^{ところ}心^{こころ}に丈^{ぢやうぶ}夫^ぶの^{ところ}所^しが^しあ^ある^るのか^かも知^しれ^れないよ」

母^{はは}は失^{しつ}望^{ぼう}してい^いい^いと^ところ^{ころ}にか^かえ^えつて頼^{たの}み^おを置^おいた。その^{びょう}く^きせ^び病^{びょう}気^きの時^{とき}にしか使^{つか}わ^わない^い渴^{かつ}く^くと
いう^{むかし}昔^{むかし}風^{ふう}の^た言^い葉^みを、何^{なん}でも食^くべ^べた^たがる^る意^い味^みに用^{もち}いて^ていた。

伯^{おじ}父^{みまい}が^き見^み舞^{まい}に^き来^きた^た時^{とき}、父^{ちち}は^ひいつ^とま^{かえ}でも^{かえ}引^ひき^と留^とめ^{かえ}て^{かえ}帰^{かえ}さ^{かえ}な^{かえ}か^{かえ}つた。淋^{さむ}しい^{さむ}から^{さむ}も^{さむ}つ^{さむ}と^{さむ}い^{さむ}て^{さむ}くれ
という^{おも}のが^{おも}重^{おも}な^{おも}理^り由^ゆであ^あつた^たが、母^{はは}や私^{わたし}が、食^くべ^べたい^{たい}だけ^{だけ}物^{もの}を^{もの}食^くべ^べさ^させ^せない^{ない}とい^いう^い不^ふ平^{へい}を^う訴^う
える^るのも、その^{もく}目^め的^{てき}の^{ひと}一^{ひと}つ^{ひと}であ^あつた^たら^らしい。